

vol. 12

選書者：サラ・デュルト

(シオヤプロジェクト、塩屋文学編集員)

●「萩原朔太郎全集」第三巻から『坂』 著者：萩原朔太郎

坂のある風景は、ふしぎに浪漫的で、のすたるぢやの感じをあたへるものだ。坂を見てみると、その風景の向うに、別の遙かな地平があるやうに思はれる。特に遠方から、透視的に見る場合がさうである。

坂が一風景としての坂が一何故にさうした特殊な情趣をもつのだらうか。理由は何でもない。それが風景における地平線を、二段に別別に切つてゐるからだ。坂は、坂の上における別の世界を、その下における世界から、二つの別な地平線で仕切つてゐる。だから我々は、坂を登ることによつて、その眼界にひらけるであらう所の、別の地平線に属する世界を想像し、未知のものへの浪漫的なあこがれを呼び起す。—「萩原朔太郎全集」第三巻から「坂」

『令女界』という比較的軟派な未婚女性向けの雑誌に1927（昭和2）年に掲載された萩原朔太郎の散文詩。なるほど後半は朔太郎の夢に頻出する娘が出てきて浪漫的。坂は見え方が絶え間なく変化するため、未知のものへの憧れを呼び起こす。が、その憧れを欺くかのように、「坂の向うにある風景は、永遠の『錯誤』にすぎないといふことを。」で締めくくられる。

「坂のある風景はふしぎにロマンティックでノスタルジック」by 朔太郎。流行らせたい。

●『蒼氓』 著者：石川達三

三ノ宮駅から山ノ手に向かう赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。—石川達三『蒼氓』

この文章は、小説の前半でブラジルへの移住者達が出発前に滞在するかつての「国立海外移民収容所」、現在の、長すぎてややいびつとも言えるネーミング「海外移住と文化の交流センター」の中の「移住ミュージアム」の展示の冒頭にも引用されている。

ブラジルへの移住を決心した者が日本のあちこちから神戸へやってきて、移民収容所へ向かう坂。一週間程度滞在してかの地について学び、準備して、また坂を下って船に乗る。神戸での彼らの行動範囲は決して広くない。そのなかで、ぬかるみの坂道、雪融けの坂道、たんに坂道、と表現を変えて、都合5回出てくる。神戸大丸から坂上の移民収容所へと続く鯉川筋が1935（昭和10）年には未舗装であったことがわかるだけでなく、見知らぬ土地に初めて来て、さらに未知の国へと赴く移住者たちの不安な気持ちが不安定な足元からも感じられる。

●『鷗外の坂』 著者：森まゆみ

森まゆみさんとは、数ある著書の一冊『またいつか歩きたい町』の一つとして塩屋の町を取り上げていただいたことが縁で交流がある。「暮らすように旅する」ことの好きな著者によって、「歩くように読む」ことができるのが、本作プロローグの『青年』が歩く。読みながら、まるで一緒にまちあるきをしているかのよう。そしてそれはそのまま、森鷗外へと繋がる。

鷗外が『青年』で「坂の上に出た。地図では知れないが、割合に幅の広い此坂はSの字をぞんざいに書いたやうに屈曲して附いている」と書いた坂。

この坂は明治になって新しく切られた坂だから正式には新坂という。S字坂、S坂などと呼ぶようになったのは、鷗外の『青年』を読んだ一高生あたりが広めたらしい。

—森まゆみ『鷗外の坂』

御隠殿坂下、清水坂（暗闇坂）下、根津裏門坂上、団子坂上観潮楼と「よくよく坂とかかわる所に住んでいる。」森鷗外。東京の坂と鷗外の住いと作品を重ねるという構成で書かれている。『鷗外の坂』は、森まゆみが「鷗外という大きな人の胸を借りて」つまり、鷗外という坂をのぼったり降りたりした記録である。

●『東京のぼる坂くだる坂』 著者：ほしおさなえ

この作者のほかの小説を読んだことはない。「坂」をキーワードに検索をして見つけた。幼い頃に家を出て行った、坂のある場所ばかりに住んだ父。没後に受け取った遺言のような坂リストを前に、当初は困惑するが、それらの坂を訪ねることで娘は徐々に父親を知ろうとする。東京の坂には江戸期より名付けられ人々に親しまれているものが多い。坂に関する知識が盛り込まれていて、物語のみならず、坂巡りを楽しむためのガイドブックにもなっている。作者は坂が好きなのだろう。私も坂が好きだから作者がどのくらい坂が好きか、小説を読むと少しはわかる。のぼっておりて、を苦としないばかりか、下から見上げるのがいいとか、のぼりとくだり、どちらのルートがよりその坂にふさわしいかを考えている。

惜しむらくは、物語の設定上致し方ないとはいえ、東京の坂ばかりが取り上げられていること。作者の父親は実際には作者と同じ文筆業。親の背を見て子は育つ。

●『トリエステの坂道』 著者：須賀敦子

留学していたとき、彼女の書くイタリアには嘘がなくて好きだと思った。

須賀敦子が長く思い焦がれてきた詩人ウンベルト・サバの生まれ故郷をはじめて訪ねる。暗くなっ
てから着いたトリエステで翌朝「このホテルで海が見えるのはここだけです」とボーイに告げられた6階
の食堂で朝食を終えバルコニーに出ると、眼下にひらけた見事な眺望を背に金髪で長身のボーイは
パン切れを踊るように空に投げ上げていた。しわがれた啼き声をたて輪舞しながらパンを嘴で受け止
めるのはカモメ。煌めくような描写に心奪われる。

たとえどんな遠い道のりでも、乗物にはたよらないで、歩こう。それがその日、自分に
課していた少ないルールのひとつだった。サバがいつも歩いていたように、私もただ歩
いてみたい。幼いとき、母や若い叔母たちに連れられて歩いた神戸の町とおなじように、
トリエステも背後にある山のつらなりが海近くまで迫っている地形だから、歩く、といっ
ても、変化に富む道のりできさほど苦にならないはずだった。地図を片手に、私はまず市
の中心部を目指して坂を降りはじめた。ー須賀敦子『トリエステの坂道』

美しく言葉を紡ぐ著者とともに歩むように読みすすめられる。